

## 高森町の秋葉信仰と片桐源栄の秋葉山詣

高森町史学会会長  
鈴木信孝氏

みなさん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました高森町史学会の鈴木信孝でございます。私はこの町の生まれではありませんので、ぜひこの町を自分の町として知り、またその中で生活をさせていただきたいと、こんなふうに思って暮らしてまいりました。

たまたま当館芦部館長様から何か研究したらどうかというようなお話をいただきまして、このテーマに取り組んで今日に至っております。

信仰に関係することに私は関わりが多いものですから、取り上げてみた次第ですが、今や信仰というものは、どうも霞の向こうの方へ消えて行ってしまいそうな、そんな時代じゃないかなと思います。

ところがコロナが流行ってアマビエなんていう、私にもよく分からないのですが、凄い怪物が出現いたしまして、皆様の耳目にも入っている事と思います。

本日のテーマ、「高森町の秋葉信仰」について、多くの秋葉碑、あるいは秋葉講、秋葉祭などの調査をさせていただきました。石碑の近くの方、あるいは石碑をお守りしておられる方、そういう方々には大変お世話をいただいましてまどまったものでございます。また、個人でお守りしておられる秋葉碑もございまして、勝手ながらお許しをいただかないで写真を撮らせていただいものもございまして、その点につきましてはよろしくご容赦のほどお願いしたいと思います。

また、この研究を進める中で、仏教的な面からは隣政寺の壬生和尚様、神道的な立場からは山吹の座光寺神官様にご教授をいただいて、その立場からの物の見方も展開をさせていただくことができました。

今日は秋葉寺、秋葉信仰、そして秋葉講、それから江戸時代座光寺氏の家老でありました片桐源栄さんという方が文化年間に秋葉参りをされて、日記を残されておりました。この日記を頼りに秋葉街道をたどって秋葉山まで参りたいと思います。始めに秋葉山大権現碑と秋葉神社の分布、二番目に秋葉様と秋葉講、秋葉祭、それから三番に信仰の原点とその変遷、四番目に片桐源栄さんの秋葉詣を取り上げたいと思います。

### I 高森町の秋葉山大権現碑・秋葉神社の分布

高森町では歴史民俗資料館による調査がしばらく前に行われ、町内の石造物が調査報告されました。その中に秋葉碑に関するものが36個出てまいります。それを頼りに各地域の碑を巡ってまいりました。そして碑建立のもととなりました秋葉講、秋葉祭が現在も続けられております。

この全秋葉碑の写真は小さいのでお手元の資料にもございます。分かりにくいところはお手元の資料をご覧ください。左上の方から順に牛牧から始まり、上市田、大島山、下市田、山

吹とそれぞれ、36個の石碑が出ています。

写真の下の三つは御社にして祀っている秋葉様でございます。

これらを整理してみますと、多くは村中、講中ですね。講を作っているみなさんでお祀りした秋葉碑が24以上あります。それから個人でお祀りをされている秋葉碑が12ございます。そして御社で祀っておられるのが三カ所ございます。

表の右側の列は現在もそこで秋葉祭をしている箇所、三カ所でございます。

では秋葉寺、秋葉社の建立について見てまいりたいと思います。秋葉様の碑を見ますと、「秋葉山大権現」と書かれた単独碑がございます。それから秋葉様と金毘羅様を並記した碑がございます。あるいはそのほかの神様も一緒に並べた碑もございます。秋葉社というのは明治の初めに神仏分離令が出されてから秋葉神社が成立創建いたしまして、各秋葉社として祀ってくることになります。ですからそれ以前の江戸時代は、秋葉三尺坊を祀る秋葉山大権現ということで、神仏習合の形で祀っておりました。碑の古いものは安永年間、1770年頃、そして多くは文化・文政時代から天保にかけて立てられております。

金毘羅様はそれからしばらく経ってから、どうやらこの地方に祀られるようになったということが分かります。

では、秋葉講と秋葉祭について見てみましょう。

講中とか村中とか、碑の中に彫ってあります。そういうものを調べてまいりますと、お社の数を合わせて27ですが、講も当然その数があったものと思われま。ところが、後ほどお話ししますが、現在行われている講は九つです。それで秋葉様祭を行っているのは三カ所で、講について聞き取りができましたのは18ございました。ですからすでに現存していない講ということですかね、そういうものがございます。そしてまだ未調査のものがございます。

講がなくなったのはなぜかと考えてみますと、昭和の太平洋戦争の前後にそういう行事ができなくなってしまった、あるいは最近になって止めた講もございまして、これらは信仰の変化というものによるものだろうと思います。

表の下の方に写っておりますのは講でございます。赤い字で書いてありますが、その講を構成している戸数です。このページは山吹の地域を書いておりますが、これだけ講が残っております。2行目の田沢・正木の講は、今も秋葉様祭をしております。

それから、こちらは下市田六カ村、それに該当する地域ですが、講は二つしか残っておりません。お祭りをしているのは牛牧の秋葉様、それから武陵地天白の秋葉様の二つでございます。(講演後吉田原地区の祭を確認)

この写真は現在行われております秋葉様祭でございます。左側の写真は田沢・正木の秋葉様を12月16日にお祭りをしております、隣政寺の和尚様をお招きして祭祀が行われております。右側は牛牧の大きな秋葉碑の前で、石碑全体の写真ですから人が小さくしか写っていませんが、まさに神社でお祭りするのと同じように神饌をお供えして、これは牛牧神社の宮司さんであります平沢神官をお招きして祭事が行われています。

こうしてみますと秋葉様っていうのは仏教なの？神様なの？と複雑になるわけでございますが、もともとこれは神仏習合が別れたものですから、こういう形になって、どちらであっても全く支障はない、民間信仰の形態の別れた形というふうに見ることができます。

それでは個別の秋葉碑を見てまいりましょう。

これはみなさん、ご存じかと思います。牛牧の十王堂に祀られておる秋葉様でございまして、高さが4 m50 cm ございます。4m50 cmの大きな碑を建ててありますので、この碑は倒れないように台座に掘り込みがしてございます。ご覧いただきますように、台座に掘り込んで立っているわけです。

ところがですね、文字を見てください。一番下の文字と台の石ですね。間が詰まっちゃってどうも恰好が取まらないですね。実はこの碑は明治になる頃、倒す事情がございました。なぜでしょうかといいことですが、実は多分、これは私の推測でありまして、地元の記録でもはっきりとは残っておりません。どういう事情でこれを倒したのだ、どうして直したのだということが後ほど出てまいります、神仏分離令が出ました。この碑が立っている場所は飯田の西教寺の分院でありました尼さんの住んでいる庵がございまして、その庭に立っておりました。

ですから神仏分離令が出た時に、それはまずいじゃないかと、どこか他の所へ移すか倒しちゃった方がいいのじゃないかということが考えられたのではないかと思います。また、ちょうどこの時期、江戸時代末期から国学がものすごい勢いでこの地域に発生いたしまして、その勢いがまさにこれを倒さざるをえないようなことになったのではなからうかということが言われております。

この碑文を書いた人は、延暦寺の苜蓿（これはお坊さんという意味です）亮照という方がお書きになられて、文政6年に立てられました。細かいところは各講とか碑の解説のところに調査記録を載せてございます。それでは何で延暦寺のお坊さんとこの碑が関係あるの？という疑問が出てまいります、それもはっきりした記録は残っておりません。牛牧の史学会のみなさんが相当研究されたようですが、突き止めることはできませんでした。瑠璃寺の瀧本和尚様のお話では、瑠璃寺というお寺は平安末期から鎌倉初期に発足いたしました。そしてこの道は最澄が東（あずま）の国に五つの佛塔を立てるために布教で通られた道でございます。江戸へ向かう天台宗比叡山の高僧は、最澄の歩んだ道を通して江戸へ向かわれたのではあるまいか、その中にこういうお坊さんがいらっしやったのではないか、瑠璃寺へは必ずお泊りになっていったのだ、というような記録からいたしまして亮照さんがお書きになったものと推測することはできます。

この写真の碑は吉田神社の境内に立てられております。左側が秋葉様の碑でございまして、右側が金毘羅様の碑です。この二つの碑を立てた年代から見ると、片や1777年、金毘羅さんがそれから70年遅れて立てています。ですから明らかに別物ですが、形はほぼ同じに作られています。吉田のみなさんは、この碑がもともとお宮の庭にあったわけではないと、どこからか移してきたのだけれど、それを今、吉田の方々に、どこにあったのだということが語られる記録は残っていないということでもあります。特徴的なのは、秋葉様の碑は篆刻文字でありまして普通の一般的な文字ではないですね。

この写真の碑は吉田の古屋敷にありまして、小林家一統の方がお立てになったことが碑の後ろに彫り込んでございます。なぜ取り上げたかと言いますと、この碑の書面左側のところに落款を彫り込んでございます。吉田の本島さんにいろいろ相談して調査をしたのですが、これによりまして上の落款は「棗棠領主」、下の落款は「蘭齋」と書いてございます。これらを調べてみますと「棗棠」というのは山吹、花ですね。山吹の花を「棗棠」と言います。それで山吹の領主、要するに座光寺家でございますね。座光寺家の蘭齋というのは「伊奈之助 為巳」さんということが分かりました。そういうことでこの碑がまさに個人の方々の碑であるということも分かりました。

この写真の碑は大島山の瑠璃寺のところにございまして日吉神社の前に立てられている碑でございます。これも左右別々であります、立てたのは文化3年ということで、両方とも一緒でございます。秋

葉碑の字が読みにくいですが、「正一位秋葉山大権現」と彫ってございます。文化3年に正一位、神様の資格とはおかしいじゃない？ということなのですが、実際に秋葉神社は明治になる時に正一位をいただいています。ですけれどもこの秋葉山ですね、秋葉山という信仰の山は朝廷の祈願所でございまして、ずっと古い時代から正一位という、山に正一位という位をいただいています。

この写真の碑は塚の秋葉様（富本銭と言えはすぐにお分かりいただけると思いますが）下市田の武陵地の古墳の上に立てられている碑でございまして、これを取り上げましたのは、武陵地の講の記録で「秋葉代参落鬮帳」と読みます。これがずっと書き続けられておりました。たまたま元治元年と書かれておりますが、この年に帳面を改めましたので、これより古いのは実は残っておりません。現在は資料館の方に寄託されて保存されております。落鬮帳、みなさんのところでも無尽なんかをやる時に、誰が一番で取りますかって籤で決める、その籤を引きますね。次の時はその人以外の方が引きます。ところがこういう信仰の籤でございまして、その年にご不幸のあったお家、都合の悪いお家はちょっと遠慮いたしまして、次かその次の年に改めて籤を引く、という行為が行われておったようでございます。

この写真の碑は下市田の北村にある秋葉様の碑でございまして、これを取り上げましたのは、これを書いて下さったのは真言宗のお坊さんなのです。真言宗のお寺は高森にはございませぬ。どういう繋がりがあったのでしょうか、というところを辿ってまいりますと、この碑ができた後、落慶法要をいたします。その時に法要を営んだのが「泉寿院」という法印、要するに修験者ですね。この方がやったということが分かりました。いずれも調べて行きますと下市田に護摩堂というところがございまして、この左の写真は護摩堂と護摩堂の前に立つ仲平さんですね、ご主人です。このお家では、この方のお祖父さんの代まで元禄のころから九代にわたって法印を務めて参りました。要するに修験者を務めていたということが分かります。お家の後ろにはその代々の法印の石碑がございまして、

この写真はまさに秋葉大権現が火から守るという象徴でございまして、下市田の市場というところがございます。真ん中に火の見（櫓）が立っております。今は半鐘を外してございまして、左側に小屋が写っています。これが消防のポンプ小屋でございまして、ですから江戸時代から現代、本当は今日までの、まさに火から守るための全施設と言いますか、そういうものが一体となって写っている、役を務めているということで取り上げました。

この写真は出原の秋葉様です。先ほど祭をしているところに参加したと言いましたが、では何をお祀りしているかといいますと、ここに小さなお社がございまして、津島様を祀っているんです。これは津島祭をされているところでございまして、お電話をしたら、この日に調べに来たらどうかということで私も参列をさせていただいて、石碑の足元を少し掘らないと見えなかったものですから、御神酒をあげて平澤神官にお祓いを受けまして、もう今日はいかようにさわっても大丈夫だというお許しをいただいて、調査をさせていただいたわけです。

この写真は隣政寺の参道に青年の家がございまして、その真向かいに建っている秋葉碑でございまして、この碑文を比叡山延暦寺大僧正・光璨というお坊さんがお書きになっている、ということでございまして、璨の字が読み取れなかったのが始めは当て読みして、隣政寺の壬生和尚様になんて読んだらいいんですかとご相談を申し上げて、ああ、それでは延暦寺の比叡山文庫に問い合わせたらというご指示をいただきました。比叡山文庫の方へ、この年代にこういうお坊さんが大僧正でおられましたかとお尋ねして、確かにそれは光璨ですよ、ということが分かりました。碑の右側にこれをお立てになった方々のお名前が彫ってあります。

この写真は新田の秋葉碑です、松川町境の増野というところに立っています。昔、集会所があったところ。この碑を取り上げましたのは、なぜ増野に立っているのか？かつて増野の半分は市町村合併の時に松川町の方に移られてしまいました。昔は新田と増野は一体でございまして、その中間地点にこの碑を立てて祀っていたのだけれども、たまたま増野が半分向こうに行き、増野の皆さんはあの奥の芝宮にお祠を立てて守っている、今も秋葉祭を行っているということで、新田のはずれになってしまったのですけれどもこういう碑が新田にはございます。

この写真は山吹下平小沼に慈照庵というお堂がございまして。そのお堂のすぐ下のところに祀られている秋葉様でございまして。この大きな石碑は金比羅さんです。右側が秋葉碑です。その間に小さな木の箱がございまして。これは実は秋葉様のお札を毎年いただいてきて、ここにあげているのだそうでございまして。

この写真は領法寺の門前に立っています石灯籠です。はじめ札掛け石がどこにあるか分からなかったのを、領法寺の岩田和尚様にご案内いただいて石灯籠に秋葉山文化13年と説明を頂きました。灯籠の右側の細い石の棒、これが下町の皆さんが毎年講でいただいてきたお札を納めているのです、ということで札掛け石と資料には載っています。文化13年に作った秋葉の灯籠だから、ここに何かがあったはずだということをおっしゃるのですね。何かってなにだろうか。少なくとも江戸時代ですからお社はございません、そうしますと秋葉碑があったのだろうと推測することができます。ところが？このすぐ近く、ここは山吹座光寺氏の家老、片桐さんがお住まいになっていたところです。その片桐さんの江戸時代末期の家老さんの片桐春一さんは伊那谷の国学平田門人の第一人者と言いますか。そして北原稲雄さんとか松尾多勢子さんとか、そういう方々と力を合わせて田沢のところに本学神社をお建てになった。そういう方でございまして。なぜあそこへお建てになったのだろうかと考えますと、やはり山吹だけでも33人の国学平田門人がいらっやったそうです。そういうことであの場所を選んでお建てになったのではないかというふうに思われます。そして神仏分離と、この国学の新しい時代を作るのだという凄い勢いのもとに、いろいろなところでこういうものがどこかに消えたり、それから瑠璃寺へ上がって行く参道の六地藏さんの首が飛んだり、あちこちのお地藏さんや観音さんの首が飛んだり倒されたり、そういうことが一時起こりました。実は神仏分離令はそういうことをやれと言ったのじゃないよ、お寺とお宮を分離しなさいと言っただけなのだから、そういう破壊行為は許さんというのが、明治政府が後になって出した御触れでございまして。

この写真は下市田中村耕地の秋葉社です。江戸時代は安養寺の鎮守堂がございまして。鎮守堂は三宝荒神を祀ってあるお社でございまして。その右側に秋葉様、左に金毘羅様が祀られておりますが、実は江戸時代はお社ではありませんでしたので、その後にお社化したものと思われまして。

## II 高森町の秋葉信仰 秋葉講と秋葉祭

なぜ火・火事が問題なの？ということと信仰とつながっているかという話です。火事を出すことは非常に大変なことであります。ひと口に「地震・雷・火事・親父」、親父は最近力は弱くなりましたのでさておいて。いかがでしょう、今日は男性方大勢でございまして、やはりそういうふうじゃないでしょうかね。地震や雷は天災でございまして。火事は人災でございまして。火事を出しますと消防機能がない時代は全て丸焼け、財産は全て失います。そして命を落とすこともありました。まして隣家が燃えてしまいますと補償はできません。そのために村八分、あるいはそこから引っ越しをしなきゃならないほどき

つい仕置きを江戸時代は受けたようでございます。最近では消防がすぐ駆けつけてくれて、本当に近くの民家でも類焼は非常に少ないような時代になりました。

それでは秋葉信仰について見てみます。秋葉信仰はもともと秋葉山という山の信仰です。山の神そのものに対する遠州地方の信仰でございました。それを秋葉大権現として崇めてきたのです。山の神様は何をしてくれるの？稲作の地域の水を守ってくれるよ、立派な林で大水も出ないように守ってくれるよ。それからこの地域に少し入りますと、ほとんどが焼畑農業でございます。田圃を作れるような平地はほとんどございませぬ。そうしますと火入れということを行って、一定のところを焼畑にいたします。大体4年ぐらい使えるのですが、4年ぐらいするともう生産能力が落ちてきて、他のところを焼きます。ということはその火が地域の周りの山に飛び火しないようにこのお札をいただいて行って、四方に立てて山火事にならないようにお守りをしたということでございます。

それから時代が変わってきますと、秋葉三尺坊を信仰する山になってきます。またこの山は山岳修験道の山でもございます。あるいは仏教、真言密教のお坊さんたちが、密教ですから山岳修行をいたしたということもございます、そのうち秋葉三尺坊というのを招いて来ます。人が来たわけではないんですね、信仰が来たわけです。三尺坊というのは実は新潟県の長岡の近くの山に蔵王堂というところがございませぬ。奈良の吉野に蔵王堂というのがございませぬ、こちらが奈良の修験道のメッカでございませぬ。そこから分祀いたしまして、長岡のこのところに蔵王堂を祀りました。蔵王堂は大きなお堂で、大きな組織です。そこを維持していくお坊さん方もいっぱいおられます。その人たちが集まっているところを坊といいます。それで坊に住んでいるお坊さんたち、それぞれの坊に名前がありました。瑠璃寺にも13の坊院がありました。そのような坊のひとつが三尺坊という坊でございませぬ、その修験者が火伏に非常に優れているということで、秋葉山の方に信仰だけが飛んで来たというわけでございませぬ。これらの山岳信仰が修験も一体となって、火伏の靈験あらたかな秋葉三尺坊として祀られております。

武陵地秋葉講の資料を拝見いたしますと、最近ですから秋葉神社にほとんど行っています。ところが神社から少し降った秋葉寺（しゅうようじ）と称していますけれども、秋葉寺の方にもお参りに行ったという記録がございませぬ。ですからこの人たちが神様仏様という区分けがなく、秋葉山大権現をお祀りしていることは秋葉三尺坊である、ということでありませぬ。

この秋葉山を支えたのは三尺坊大権現という看板のもとに、秋葉寺という別当寺がございませぬ。そして修験衆、神官衆です。こういう三者が一体となったお山でございませぬ。

面白いことに下市田の古文書に、秋葉寺からの通知について書かれております。

信濃国伊那郡市田村年番から所管の村々に出された廻文により、「修験方（御師と言いますが）村々を巡村し御符（お札）を授け、浄財を集める」。要するに寄付金を集めてくるわけですね。そして秋葉山にお参りに来てくださいねという勧誘をするわけですね。という古文書が下市田に残っていたということです。

ところがいよいよ明治になりますと神仏分離令が出されてきて、修験の人たち、修験宗というのが廃止になります。ですから修験者という形は存続しないということになるのです。そして先ほどのような神様と仏様一体のような祀り方は駄目だと言うことで、その場所はお宮になるのかお寺になるのかどっちかにしろ、というお触れが出まして、この秋葉山はお宮になりました。

この図は江戸時代、の秋葉山の姿でございませぬ。真ん中の建物が観音堂でございませぬ。その奥に御本

尊ということで三尺坊を祀っております。左側の大きな建物が別当秋葉寺でございます。そして右下の方に小さな門がございますが、これが山門、仁王門でございます。右の方、仁王門を下りますと、表参道、東海道へ通じております。

上の方に小さな鳥居がありますがお分かりでしょうか。真ん中の上の辺ですね。書いてある小さな文字を見ますと、「信州飯田迄弐二里」と書いてあります。左の方の下へ降りますと、三河の方へ通ずる西参道がございます。

これが現在の秋葉神社です。今の観音堂の場所を使って神社の建物が建っております。実は先ほどの観音堂がそのまま秋葉神社拜殿として使われてきましたが、昭和 18 年に丸焼けになります。そして昭和 60 年にこの建物が立ちます。その間は どうしていたかと言いますと、50 丁下った里に仮の社を建て、今は下社と言っていますが、そこで祭祀を行い、お札を出していたということのようです。ですからこの写真を見ると、みなさん、行かれたことがあるよと言われるかと思います。

#### IV 秋葉山への道

##### 1 片桐源栄の秋葉山詣 秋葉の枝折

それでは次に話を転じまして、秋葉山への道ということでみなさんと一緒に、旅日記に綴られた内容に沿って、秋葉街道をこれから秋葉山まで辿って参りたいと思います。

これが片桐源栄さんが残した枝折でございます。(プロジェクターの地図を見て?) 真ん中の上の辺が山吹でございます。山吹から出まして青い線が天竜川です。天竜川を渡りまして、小川路峠へ上ります。そして上村へ下りまして、当時は上村(かどむら)と言いましたが、上村へ下ります。和田を通りまして青崩峠へ上ります。今、トンネルを掘削中ですね。それから青崩峠を越えますと水窪へ出ます。水窪川に沿ってずっと下って参りまして、秋葉山へ上がって行くわけですが、ちょうど真ん中の下の辺に道が角々々と曲がっているところがありますが、ここが秋葉山です。

源栄さんは途中、寄り道をしておりまして、天竜川をもう一度渡って戻ってきて、それから秋葉山の方へ行っております。

旅日記では秋葉山から東海道へ出まして、法多山にお参りして、それからずっと東海道を通りまして吉田の宿、吉田の宿と申しますと今の豊橋ですね。小遣帳を見ますとそこに行つて大金を使っています。どうやら精進落としをしたのではなかろうかと思ひます。旅は歩きですからね、大体、秋葉山まで山吹から 110 キロぐらいあるのですね。それを歩いて行きますから大変な道のりです。そして豊川稲荷にお参りして鳳来寺に寄つて戻つて来る。そういうのが一般的な歩き方であつたようでございます。

実は下市田の大沢一穂さんという方がいらつしゃいまして、明治の終わりか大正に入つてすぐだと思ひますが、この方もこの講のみなさんで、秋葉詣りに行きます。まさに秋葉街道そのものを通つて歩いて行つておられまして、帰りは豊橋に出つて帰つて来るんですけども、途中で旅行会社じゃないけれども勧誘をいただきまして、お伊勢さんまで行つています。旅というのは非常に楽しみであつたということがよく分かると思ひます。

これが枝折の 1 ページ目でございます。まさにこれを見ましても、なかなか読み切れませんね。そこで左側に読み下しをしていただきました。これは高森町の古文書研究会の講師をしておられます吉澤章先生にお願いして、先ほどの枝折を全ページ読んでいただきました。

少し読んでみましょう。

「秋葉へ年久しき宿願ありて 弥生末の四日出たつ」。弥生末といいますと、今の4月ですね。4月の末の4日というのは24日という意味です。中の4日は14日ですよ。そして、「わたりきて心もうきたちぬ 祈をきて 物へと我は旅立を はるをしたふと 人やみるらん」。その次の文も面白いですね。「小川の里へ弐里計 爰にて酒のむ」。ずっと日記を見ていきますとしょっちゅう一杯やってるのですよ。峠の上で一杯とかね。お昼を食べて一杯。夜も一杯。眠れないからまた一杯。本当に源栄さんが健康だった証拠だと思いますけれども、旅の疲れもあってよくお酒を飲んだり。「山吹ハふしのしなひの 何なれハ うらむらさきに口なしのいろ 小川ぢとうげといへるハのぼりくんだり五里ありとなん まことに深山幽谷の中にて ひとわびしき山ぢなり ここかしこ 桜の花あり 小川ぢや いま咲く花のなかりせば 此山 ふみハせられざらまし 岩つつじもさかりなれば なぐさみて さくをぞみる 岩つつじ」。

この時、源栄さんは40歳ということでございます。あつ41歳ですね。

お供の忠毅って出てきますが、「伴 忠毅 本名 平栗才兵衛」さんという方をお供にして行ったようです。

次は小遣帳の1ページです。「三月廿四日」今の4月ですね。2行目に「三十弐文 舟ちん 兩人」と書いてございます。天竜川を渡る時、先ほどの日記の方には「どこで渡ったよ」なんて書いてないんです。でもこのお金の記録から見ると、どうやら天竜川を舟で渡ったということが分かります。そして船賃二人で三十弐文、ひとり十六文ということでもあります。中部（なかっぺ）で天竜川を向こうへ渡って戻って来ると言いますと、だいたい船賃が倍になります。想像していただいても天竜川の水の量も川幅も相当に大きくなります。ですから三十弐文ではとても渡りきれません。だいたい倍かかっています。

それから、お酒のことがいっぱいありますが、夜中にお酒、とかね。「同日三十弐文 とうげ 弁当二人」これも三十弐文です。それから後ろの方にですね。廿二文でわらぢを買ったって書いてあるんですね。それでは廿二文っていくらぐらいでしょう。わらぢって、そんなに高くしては困るんですよ、じきに破れてしまうものですから。そこで考えますと、先ほどの弁当のお金から数えても1文が30円くらいかな。お昼のお弁当三十弐文、1人十六文、30円かけても480円、500円ならばコンビニ弁当かなって今なら思いますけれども、まあそんなようでございます。

こんな記録がずっと、旅を回って帰って来るまで。実はお土産はどこで買ったと思います？ 駒場で買っているのです。重たいじゃないですか。そこで家へのお土産は駒場で買ったって書いてあります。

では次にまいります。この写真は道標（みちしるべ）でございます。現在も残っているものでありまして、左の写真の道標が出原の上街道に今も残っています。それからちょっと下ってきまして、次の碑が吉田へ出たところです。それから右側の中の碑が、この役場から下って行って、すぐ下の交差点ありますよね、塚越。あそこに立っている碑でございまして、もう真茶色になっていて読めなかったものですから、ちょっと洗わせていただいて、墨の粉を振り込んで写真を撮ったものでございます。ここの前に住んでいるおばあちゃんが「私ねえ、この碑が読めないの。子どもたちに説明してやりたいんだけど読めないの」、こうやってきれいにしたら「ああ、やっとなは日々、通る子どもたちに何か話ができる」って喜んでおりました。昔はちゃんときれいにしていたものと思います。そしてこの右も下市田を下って行ったところにあります。

次の左の写真の碑は、ここの給食センターのところにあった碑でございます。給食センターのところ



は、昔は交差点だったと思われます。今、農協から越えて行きますけれども、まっすぐ資料館の中を突っ切って出た辺が交差点だったのだらうと思います。「高森の道」のイベントが今、資料館で行われていますが、この碑を掘り出してきて、資料館を入ったところに展示してございます。ぜひご覧ください。

それから真ん中写真の碑は、ちょうど農協と資料館の交差点の、大丸山公園の入口に立っています。右の写真の碑は「橋供養」と書いてございまして、これはずっと下って行って天竜川を見下ろすところまでまいりますと、下田という小字がございまして、北原さんというお家のお墓の一角に立てられています。その碑の内容につきましては、資料の中に書いてございます。

この写真は、ずっと時代が下って現代の写真をお借りして載せてございます。左側の写真は天竜川を渡る舟でございまして、「明神下の渡」と言います。今の明神橋が出来るまでこの舟が豊丘とを行ったり来たりしていました。右側の写真の舟は「下田の渡」と言います。豊丘の伴野との間を行き来しておりました。右側の写真を見ますと、上にワイヤーが張ってあるのです。もう時代がつい最近ですので、大正の初めごろの写真かと思います。そうしますとワイヤーを張って舟に滑車をつけるとどういうことになるかと言いますと、何もないと舟は漕ぎだしてから川の流れに押されて、やや下流にしか着けません。そうすると今度は乗船場まで舟を引きあげて、またこちらへ来るということになります。その苦労を減らすためにワイヤーで滑車をつけて舟を漕いで行き来しますと、同じ地点を行ったり来たりできます。そのために乗船場も固定できて、下船場も固定できるということが分かっております。

次に源栄さんが「ここで酒飲む」と書いてあります小川です。この写真は小川の医泉寺、今はこういう建物は残ってなくてお堂ですけども、当時は医泉寺というお寺がございまして、そこで右側の(写真の)刷物を出しておりました。

これが「秋葉山道中記」という刷物でありまして、小川から秋葉山までの距離が書いてございます。どこからどこまで何里、どこからどこまで何里、というふうに書いて、通行人に配っておりました。ではそれが何で今、残っているの?ということですが、これは下伊那教育会の保存館に市村威人さんの資料が山積みになっていて、調査しているのがございます。その中にこの一枚が残っておりまして、そこから写真を撮らせていただいたものです。

それでは小川路峠へまいります。左側の写真は越久保、上久堅の越久保という集落がございまして、そこから小川路峠道というのが始まります。峠まで33観音が立ちまして、通行する人の目印、あるいは一息つく、そんなことになっておりました。建物が立っておりますのが1番観音で、建物の中に1番の観音様が祀られております。

右側の写真は一足飛びに峠まで行きました。33番目の観音様でございます。なんでいくつもあるの?ということですが、上村から上がって来ますのも33番、こちらからも33番、じゃ、もう一つは何なの。実は秩父霊場は34観音でございました。それで34という観音様が一緒に祀られております。ここは峠の茶屋があったところの石垣の上に二人、腰かけております。実は小川と言いますか、上久堅では、小川路峠へ登る行事が毎年、続けられておまして、中学生ぐらいになると1時間ぐらいで飛んで行って、1時間ぐらいで飛んで下りてきちゃうのです。私は3時間ぐらいかけて、やっそこやっそこ登って来ました。そしてこの右側の写真は、そこから眺められる南アルプスで、一番右側の山が聖岳でございまして、そして左側の木の枝がちょっと被っておりますが、赤石岳でございまして。

次の写真は、昔、ここで茶店を営んでおまして、花菱屋という宿も兼ねていたところがございまして。ここで源栄さんはお弁当を買って食べているのです。これは昭和の初めごろ、もう廃業した後の建物

です。馬方さんが荷物を馬につけて、馬方さんも荷物をいっぱい背負って、峠を越えて物を運んでいた、ということでもあります。ではその峠道は何で廃止になったのかと言いますと、ここに赤石索道という索道がつきまして、遠山谷の材木を、索道で小川まで運んでおりました。飯田線が開通すると座光寺まで索道を延ばして運びました。同じように大鹿ではトロッコで出しまして、生田から伊那田島の駅あたりまで索道をかけて材木を出しました。そうなりますと、製材して余分なものを削ったものを、ということになるかと思えます。

峠を下りまして上村に出ます。昔は「かどむら」と言いました。上村の小松屋というところに泊まって、264文で、ひとりあたり130文ぐらい払うのですね。これが東海道に出ますとね、200文です。こちらはローカル線ですのでちょっと安いのです。153号線、根場の方に戻って来るのですが、どちらも大体同じで130文ぐらいです。ですから東海道はおおむね200文で泊り相場ができていたようでございます。

この写真は上村の八幡社で、右側は木沢の八幡社でございます。

遠山では11月に霜月祭が始まったかと思えますが、右側の(写真は)木沢の八幡社の中の、湯立神楽をするための、くど(かまど)でございます。そして大きなお鍋と申しますか、それを並べて湯を沸かして、湯立神楽が11月に行われます。だんだん行われるところが減って来ましたね。

この左の写真は和田の町、龍淵寺というお寺でございますが、ここが遠山様のお城跡でございます。この写真は遠山様の墓地です。龍淵寺の一番高いところに祀ってございます。

右側の写真ですが、さらに青崩峠に向かって進みますと、梁木島番所というのがございます。今、建っているところよりもはるか奥にあったのですが、水害で現在地に移されて、これは遠山谷から禁制の白木が運び出されるのを検問するといいますが、関所に近い立場のものです。多分、源栄さんもここで通行手形を出して、許可をいただいて越えて行ったものと思います。武士と言えども通行手形は必要でございました。

この写真は青崩峠です。峠、ちょっと見にくいのですが、左側の写真は向こうが水窪側です。右の写真を見ていただくと分かりますが、石畳がうってございます。この峠から先は雨量が多くなり道が非常に傷みやすいということで、現在も石畳がうってあります。峠を越えるツアーがございまして、今はコロナで中止ですが、また再開されるものだと思います。比較的、無理なく越えられる峠ですので、健脚の方は歩いて見られるとよいと思います。小川路峠は、ちょっと勧められません。大変です。

この写真は、水窪の町です。石段になっていまして、昔は石段ではなかったと思えますね。馬が越えたり人が荷物を背負って越えて行ったところです。現在も街並みが続いております。

右側の写真は山住神社でございまして、源栄さんはこの山住神社へは行っておりません。この(狛犬)は御犬様、狼を祀っております。なんで狼?って言いますと、実はみなさん、ご存じですかね。天龍村に坂部という有名なところがございます。そこにも狼を祀っているお社がございまして。狼がなんで祀られるのかと申しますと、狼は猪や害獣、大変な害を農業に与える動物をやっつけてくれます。ということで昔の人は、江戸時代から後で絶えてしまったのですが、狼は非常にありがたい動物でありました。ということで狼を祀っております。

この写真は源栄さんがどうしても行きたかったらしいのですが、秋葉街道から逸れまして、今の中部天竜という飯田線の駅があります。そこで天竜川を渡って向こうへ行って、神妻神社へお参りをし西渡付近でまた天竜川を渡っております。

この写真は西渡というところでございます、左側の写真です。この写真は写りが悪くてすみませんが、建物はバスの休憩所です。左側に碑が立っておりますが、山頭火の歌碑でございます。

源栄さんはここへ戻ってきて水窪川を渡って奥の院へ進んでおります。奥の院はもともと龍頭山の山頂にあったのですが、神仏分離した時に秋葉寺が廃寺になったものですから奥の院は別のお寺の管理になってしまいました。秋葉寺ではさらにその奥のところに修験者の宿泊所があったところを奥の院として今でも柴松明による火祭りを行っております。

こここのところに2行目の赤い字も3行目の赤い字も散銭と書いてございます。散銭って何なの？ということですが、実はこれは賽銭のことですね。みなさんがお宮にお参りして鈴をびんびんって鳴らしますね。柏手を打ちます。なんで打つのでしょうか。出雲では3回打ちますね。どうも出雲の神様は反応が遅いようで、三つ打たないと。実は神様も仏様もちりーんとか、そういう音がしないと奥の方に出てこないのですよ。お賽銭もばらばら一ってやると、おお、来たかって出て来てくれる、対応してくれる。これは冗談ですけども、みなさん、たくさんお賽銭をあげればいいって千円札1万円札ってあげても音がしないですから反応してくれないかもしれないので、1万円あげるのだったら500円玉20枚をじゃらじゃらじゃらってやったらいかがでしょう。まあ余談でございますが、散銭とはそういう意味でございます。

ここにお札（おふだ）20枚20文、1枚1文、さっき1文30円ぐらいかなって言いましたけれども、多分、旅人が背負って帰るわけですから、大きなお札はないと思います。ほんの小さなお札だろうと思います。

これは先ほどありました秋葉神社の写真ですが、ここでお参りをして、東海道の方へ下るわけです。

右側の写真ですね。神社の前の石段の上から眺めると、この日は天気が良くて遠くに遠州灘が眺められます。ということはこのお山は逆に、遠州一円から望むことができるお山だということです。

では先ほどの仁王門、山門も今は髓神門（隨身門）ですが、神様を守る二体の像はここに入っておりません。右側（の写真）は、明治の時に廃寺になったお寺ですね。明治8年に地元のみなさんの篤い信仰から復興いたします。秋葉寺（しゅうようじ）と言っておりますがそこには秋葉三尺坊を祀っております、右側の写真の烏天狗が秋葉三尺坊のお像でございます。

じゃあ御本尊様の観音様はどうなったのかと言うと、三尺坊さんの祀られている真殿右側のところに祭壇を設けて、観音様を祀っております。

左側の写真はこのお寺を下って来ますと富士見茶屋という茶屋が昔はあって、いくつもあったようでございますけれども、富士山の見えるところですよ。天候が良かったものですから、誠に見事に富士山を見ることができました。12月の16日でしたので、富士山はしっかり雪が来ておりました。源栄さんは4月の27日くらいですから、まだ多分、富士の嶺は白かったものと思います。

さあ下って参りますが、表参道はこのとおり、石灯籠それからいろんなものが廃棄、要するに壊されてしまっていて、まさにそのままの状態です。ですから何でこんなに壊れているのという感覚を持ちますが、その時の神仏分離令の置物だろうと思います。下って参りますと左側、三の鳥居のところですよ。右側の写真には九里橋と書いてございます。九里橋というのは、東海道から秋葉山の表参道の入口まで九里ございます。それから名をつけて九里橋と言われておりますが、ここからまさに50町、上り坂がございます。標高差で500メートル位あるのですかね。結構、きついです。でもこれは歩いて上がらないと。バスで行くと秋葉神社のすぐ横の大駐車場に横づけでありますので、御利益が少ないかもしれません。

## 2 秋葉寺の火祭り

秋葉の火祭りについて私が見て来たことをお話します。12月の15, 16, 17日。旧暦で言いますと11月ですね。この時に行われます。大護摩供養が行われまして、まず本堂の前に護摩木を積み上げます。そうして夜ですので、右側の写真は火祭りを修養する方々が、修験者なのですね、山伏。羽黒山にも行って来ましたが、そういうのを執り行うのはすべて山伏のようです。それでお寺は何をすかかって言ったら、厄除けの祈禱しているところです。火祭(火鎮め)をする方々は山伏、行者で、この方々は御嶽行者でございます。

左側の、頭がつるんとして黒い着物を着ている方は三穂立石の村松さんという方で、稲沢市の方に住んでいらっしゃるんですけども、なかなか格の高い修験者でございます。ここで炭火に当たりながら時間が来るまで待っているわけです。そこで私も一緒に火にあたりながら話を伺うことができました。

さあ、いろいろな行事が始まります。左側はみなさんの厄除け祈願をするところでありまして、奥の方にいらっしゃるはお坊さんです。お坊さん方が大般若経を転読しておられまして、大般若経はもとも600巻ございまして、600巻全部読み通すわけですけども一人ではとても間に合いません。そこで近くの同じ宗派のお坊さん方にお集まりいただいて読むのですが、60人集まっても一人10巻読む、それで1巻には漢字だらだら。そこでどう読むかと言いますと1巻を取り上げますと、こうやってお経をだあーっと。みなさんと一緒に大般若経を唱えています。左手から右手にだあーっと流します。そして次のお経へ。これで600巻やるわけです。そしてみなさんの厄除けの祈願をしておられます。

手前に並ぶ白装束の方々が行者さんでございます。そしてその右側に参列しておられるのが一般の信者と言いますか、お参りに来た方、厄除けに来た方でございます。私どもも一緒にここで大般若経を読み上げるといいますか、いたします。

写真右は、お坊さんの仕事でありまして、三尺坊は全国のあちらこちらで祀られておりますので、15日の夜にはこのお寺から飛び立って、全国を飛び回って来ます。16日には戻って来ます。そして先ほどの真殿というところに戻られる。その行事を住職が中心になって行っているところでありまして。現在の住職はお若い方でございますね。

いよいよ火祭りの部分です。左は護摩木に点火するための種火をとっているところでありまして。そして右側は行者さんたちが呪文を唱えながら護摩木に点火いたしまして、まさに燃え盛ってきます。真ん中にひとり、何かを手で抱えて火の燃え盛る中にじっと立っているのですね。これも火の修行だと思えますけれども。いよいよ火葬になってしまったら大変です。もうどうにもならないという時に、この手をぱっと放して飛び降りてしまいます。火はどんどん燃え盛るのですね。そうしますと持っておいたのは和紙、紙です。丈夫な和紙を四畳ほどの大きさにして、上のところに白いのが見えていると思えますが、これね、紐で吊っているのです、和紙を、四方で。吊って支えているのは何かというと竹竿です。柔らかい竹竿です。ですからちょうど良い具合に高さが止まるところで撓っているのです。それで炎の勢いでこの和紙がわーん・わん・わーん・わん、上がったたり下がったりするのです。

そして行者さんたちはここで呪文を唱えています。そして火がおさまってきますと和紙を参詣者が奪い合って分けて護符として持ち帰ります。護摩木が燃えつきますと行者さんたちが火伏をいたします。長い竹竿の棒を持ちまして火を叩いて、火を消しておりまして、そこそこ火が弱くなりますとこの行者

さんたちが、今は草履を履いていますが素足になりましてこの火を、熾を蹴っ飛ばして真ん中を突っ切ります。まさに火の荒行でございます。とても私どもには真似することはできません。

右側の写真はどうなっているかと言いますと、そう言っても私どもも厄除けの為に、お参りする人も火渡りをいたします。その時はこの竹の棒で火を少し除けてくださいます、まだ熾はちらちらと足元にあるのです。それを踏んでここを渡って行きます。素足です。二人目の人が靴を持っていますね。こうやって渡りまして、その先に実はバケツに水を入れてくださってありまして、足を洗って靴を履く。ということで、熱いかなどうかと心配したのですが、なんとなくそんな気にもならなくてここを渡り切りました。そして火渡りの行事がすべて終了いたします。

修験というのが中心になって、この三尺坊を祀っておるわけですがけれども、お寺さんの下で修験者が中心になって行事をしたり、秋葉山のお札を配りに来ていたということでありました。修験の人たちって何なの？修験道って？この方々と話をしたり、羽黒山の修験者とも話をしたりして、あるいは資料や何かを見ますと、神仏習合の世界でございます。

昨日だったかですね。NHK-BSの番組で修験の方の映像が流されて、ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。あの方は仏教、お寺に戻るのだと言っていましたから仏教の方です。神社に所属する方もいらっしゃいます。羽黒山でいろいろ話を聞いていますと、神社からの手続きで修行する人も、お寺からの手続きで修行する人も、一緒になって羽黒三山を巡って修行しておられます。ですから、その中に入ってしまうと神も仏もございません。ということは神仏混交になっておるようです。

言うなれば自然への畏敬の念、あるいは恐怖の念。誰でもお持ちになると思うのですが、それに対する自然への信仰であろうか。そして、みなさんの護国豊饒や無病息災に対する祈りをなされる。人は生まれてから死ぬまでは大自然の中に生かされているのです。そういう自然に包まれて生きている、自分が生き抜いているのではなくて生かされているという考え方のようなのです。そういうことをきちっと達成するために、修験はこれを乗り越えるための肉体と精神の修練の場である。そういうことを仰っています。

これは私観ですのであまり大きな話ではありませんが、宗教というものがどう変わってきたかということを考えてみますと、江戸時代はお寺で戸籍を管理していました。そうしますと戸籍抄本、住民票をお寺が発行しています。そして庄屋様も入っています。庄屋様は実際、自分のところに誰が住んでいて、どう税を納めるかとか、役を割りつけなければいけないとか、実際の行政を行う。そういうのが江戸時代でした。明治になりますとそれは廃止されまして、お役所が戸籍を管理するようになりました。近代日本国家を世界の中でこの国にも侵されないために、強い国家にしなければいけない。そのためには国民の心をひとつにしなければいけない。そういうことから国家神道として、神道の国になりました。そのためにその最後のほうは、大東亜戦争、太平洋戦争なんか大変な御苦労があったと思います。

そんなことでこの修験が廃止されたり、いろいろなものが変わってまいりました。またみなさんご存じのように、科学文明が発達してお医者さんができたり、それから消防が確立したり、いろいろな心配事がなくなってまいりました。そうしましてその結果は信仰ってなんだろうな、消えてっちゃうそうだね、なくてもいいわ、いやまあお寺で言ってきたで、ちょっとお塔婆をもらいに行ってくるかぐらいで、だんだんそういうものへの信仰というのは薄れてきたのですが、しかし人間は生ものでございます。生きている間しか生きられません。生きているっていうことは自然の中に生かされている。明日のことも分かりません。生かされているってそういうことなのだな、それは変わらないのじゃないか、それがも

ともとの信仰なんじゃないだろうか。仏教だとかキリスト教だとかの教義以前の、人の持っているものが信仰なのだろうなということを考えてまいりますと、秋葉寺もその時代のみなさんの、火災に対する信仰でだろうと思います。

神様でも仏様でもない、とにかく信仰そのものであったのだろうな、というふうに考えることができると思います。

みなさんにお伺いした講や碑の経歴やいろいろなことにつきましては説明する時間も足りませんので、お手元の資料の中に、それぞれお伺いしたことは書き留めさせていただきました。

またいろいろな講の方々や代参された時の記録なんかも拝見をすることができましたので、これが参考になるかどうかは分かりませんが、ぜひまた、そんなものがあつたのだなということかと思えますけれども、参考になればありがたいと思います。

以上をもってお話の方は終わりにしたいと思います。とにかくこの記録をまとめるにあたりましては、50人ぐらいですかね、世帯数というより人の数で50人以上の方々にお尋ねしたり聞いたり教えていただいたりして、やっとできた次第であります。まだみなさんが「俺のところの講のことが載ってないじゃないか」「俺のところの碑がここには載ってないじゃないか」というのがありましたら、ぜひ教えていただきたいと思えます。この資料をさらにバージョンアップをしてこの町の記録として保存していただくことができれば、さらにうれしいかなと考えております。

本当にいろいろな方にお世話になりまして、改めてここで感謝を申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

以上

